

庭で恵まれた生活をしております。内外ともに厳しい今日ですが、日本の今日の平和がいつまでも続くことを願ってペンを置きます。

## 二兎失い、四十日間の逃避行

岩手県 高瀬 三郎

昭和九年、茨城県立太子農学校卒業。当時の満州開拓への国策に順じて大陸での農業に従事したい気持ちから、文部省立の盛岡高等農林農学部所属の第一拓殖訓練所に入所。翌十二年二月、修了と共に密山県第五次永安屯開拓団に入植。以来九年、開拓に専念。入植三年後、私は妻を迎え、一女一男を得て、十ヘクタールの農地に雑穀、野菜を中心に経営も向上、更に畜産、養豚、緬羊、蜂蜜を加え、充実した経営にはいつていた時期でもあった。

経営は順調に発展、地域中国人との交流も仲良く、満州国発展への大きな貢献をはたし得る状況のながて、二

十年八月九日未明、ソ連機によって永安駅付近が爆撃を受け、満州国侵攻が始まり、ただちに部落長会議が召集され、日ソ戦闘状態にはいったので、数日間の食糧と身のまわりの品を持って、全員山地に近い岩手部落に集結。奥山に避難することに決定。翌十日午後集結。その間ソ連の空爆がたえまなく行われ、その後の行動についてはリーダーの軟弱さもあって、意見がまとまらず、けっきょく各部落ごとの自由行動をとる結果となった。こうした状況のなかで、ついに二個集団が部落にもどり、自決を選び、われわれが去ったあとの情報によると自決したことが知らされた。

このような状況のなかで、降りしきる雨のなかの行動、そして目的地を目ざして行く途中では、坂田密山県長がソ連の機銃掃射でわれわれの目の前で即死され、われわれは難をのがれ、山中の避難を中心に行動する。途中で食糧は思うようにならず、取り残されたトウキビ、馬鈴薯、南瓜、など、更にブドウの葉等に助けられながら、現地を出て数十日、爆撃、夜を徹しての行動。出発地点の同志とはバラバラに離れ、家族を守るのが精

一杯。途中での犠牲者は数しれず、最後の山、ローヤル山脈を越える途中、敗戦のピラも信ぜず、しかしついに精魂つきた四十日におよぶ山岳の避難行、ヤプロニでソ連の捕虜、収容所に入り、家族とも分離、転々(三か所)と収容所を移動させられ、やっと家族とはいっしょになり、列車で牡丹江からハルビンへ送られ、車中で長女(七歳)死亡。ハルビン到着と同時にほかの女の子とともに埋葬。二―三日休養して、新京へ。途中衣類の略奪、十月の満州の寒さに耐え、衣類の代りに、持ち合せのコモを巻きつけ、新京に着いたとき、今までに見たことのない惨状だといわれるほど。

この寒さに耐えかねた長男(五歳)は肺炎で死亡。日本人墓地に埋葬。妊娠中の体をここまでがんばり、収容所(室町小学校)の中で女の子を生み、乳が一滴も出ない苦境のなか、どうにかまわりのあたたかい支援もあって、生き続けた。神のめぐみと心から感謝している。

今では二男一女の母親に生長した。そして新京では、先にたどり着いた同志の方々が待っていた収容所にはいり、生気を取りもどすようになった。ところが、発疹チ

フスでつぎつぎに他界されたのが残念でならない。

昭和二十年の厳冬を越え、新京第三輸送団の一次として、二十一年七月、ようやくにしてコロ島港より佐世保の港に上陸、九月一月、故郷にたどりついた。

帰国早々十月から、開拓の同志達の再起を願ひ、東北地方を中心に、適地調査に入る。三か月の調査の末、現住地に決定。翌二十二年引揚げてきた希望同志を集め、四月に国有地を解放してもらい、入植する。人数八十戸。大森林の農地の開発は血の出る思いで頑張った、これに耐えられず、離農者は三十%におよび、その苦難の道はなみたいていのもではなかった。しかしよく耐え、ついに、畜産(酪農中心)の実績をあげ、昭和五十七年、村づくり部門で、天皇杯を受賞するまでに一致団結して頑張り、今日にいたった。